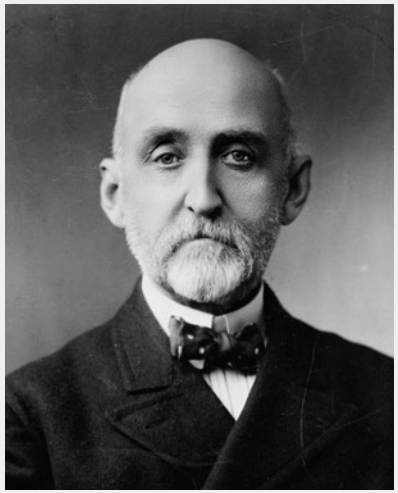
マハン海戦論

目次

図表一覧——010
編者序文——011

第一部 海軍の基本原則

第一章 歴史研究の価値——028
第二章 「理論的」訓練VS「実践的」訓練——033
歴史的事例——033
実践的とは何か?——035
第三章 シー・パワーの諸要素——042
第四章 用語の定義——080
戦略、戦術、兵站——080
第五章 根本原則——082
中央位置、内線、交通路——082
集中——093



Alfred Thayer Mahan
アルフレッド・セイヤー・マハン

第六章　戦略位置——103
(1)立地条件——104
(2)軍事的強さ——106
(3)資源——109
第七章　戦略線——111
交通——111
海上交通の重要性——113
第八章　攻勢作戦——116
第九章　防勢の価値——126
第一〇章　通商破壊と封鎖——131
決定的な制海——139
第一一章　メキシコ湾とカリブ海の戦略的特徴——141
第一二章　海軍運営の基本原則——156
対立する要素——156
イギリスの制度——162
米国の制度——167
第一三章　服従の軍事規則——169
第一四章　海戦への備え——173
第二部　歴史におけるシー・パワー
第一五章　孤立により疲弊した国家——182
ルイ一四世治下のフランス——182
第一六章　イギリスのシー・パワーの発展——187
ユトレヒトの和約(一七一五年)後のイギリス——187
第一七章　七年戦争の結果——194
第一八章　一八世紀の海軍戦術における形式主義——203
第一九章　新しい戦術——208
ロドニーとド・ギシェン、一七八〇年四月一七日——208
第二〇章　アメリカ独立戦争におけるシー・パワー——214
チェサピーク湾沖のグレイヴスとド・グラス——214
第二一章　革命によって士気をくじかれたフランス海軍——222
第二二章　一七九四年六月一日のハウの勝利——226

第二三章　コペンハーゲンにおけるネルソンの戦略——238
第二四章　イギリスの第一防衛線——249
第二五章　トラファルガーの海戦——256
「ネルソン・タッチ」——262
戦闘——272
トラファルガーの海戦後の通商戦争——289
第二六章　一八一二年戦争〈米英戦争〉の全般的戦略——296
北部戦役の結果——304
第二七章　米西戦争の教訓——311
「現存艦隊」の可能性——311
第二八章　サンティアゴ封鎖——324
第二九章　「現存艦隊」と「要塞艦隊」——331
日露戦争中の旅順戦隊——331
分断された戦力——346
第三〇章　対馬でのロジェストヴェンスキー——354

第三部　海軍政策と国家政策

第三一章　領土拡大と海外基地——364
ハワイ併合——364
第三二章　モンロー主義の適用——368
英米権益共同体——368
第三三章　米国と日本の変化——377
第三四章　太平洋における米国の権益——380
第三五章　ドイツ国家とその脅威——383
イギリスのシー・パワーの砦——388
第三六章　島国の位置の利点——390
イギリスと大陸列強——390
第三七章　政治発展による海軍政策と海軍戦略の偏向——399
第三八章　海上における私有財産の拿捕——411
第三九章　戦争の道徳的側面——426
第四〇章　戦争の実際的側面——433
第四一章　海軍力を求める動機——441

附録

マハンの年譜——446
名誉学位など——448
公刊著作一覧——448
訳者あとがき——451
索引——485

［訳文凡例］

✣——訳者追記は本文中に〈　〉内に記した。

✣——編註は頁下段に▼で、訳註は頁下段に❖で示した。編註に追記する場合には〈訳註。……〉とした。

✣——訳註における階級表記は、人物の説明の際には最終階級、出来事の説明の際には当時の階級を基準とした。

✣——訳註の作成にあたっては、マハンの各著作および『コーベット海洋戦略の諸原則』（原書房、二〇一六年）のほか、以下の書籍等を中心に参照した。Peter Kemp, ed., *The Oxford Companion to Ships & the Sea* (Oxford, 1976); R.G. Grant, ed., *Battle at Sea: 3000 Years of Naval Warfare* (London, 2008); T.A. Heathcote, *The British Admirals of the Fleet 1734-1995: A Biographical Dictionary* (Barnsley, 2002); John D. Grainger, *Dictionary of British Naval Battles* (Woodbridge, 2012); N.A.M. Rodger, *The Command of the Ocean: A Naval History of Britain, 1649-1815* (London, 2004); Richard Harding, *Seapower and Naval Warfare, 1650-1830* (London, 1999); Lawrence Sondhaus, *Naval Warfare, 1815-1914* (Abingdon, 2001); *Oxford Dictionary of National Biography*.

✣——人名、地名は基本的に各国の原語の発音を採用した。ただし、一部英語表記が相応しいと思われる場合にはこの限りでない。たとえば、アシャント島、ジャットランド海戦など。

✣——軍事用語については、現代的な用語や旧日本陸海軍の用語を参照したが、時代性を反映しているものに関しては極力原語のニュアンスを活かし、あえて現代的な用語に統一しなかった。

✣——イングランド／イギリスの表記については、判別できる限りにおいて一七〇七年の合同法以前をイングランド、以後をイギリスとした。原文にはEnglandとGreat Britainの表記が混在しているが、マハン自身はイングランド／イギリスを明確には区別していない。なお、British Islandsはブリテン諸島とした。

［図表一覧］

図1——地中海(A.T. Mahan, *The Influence of Sea Power Upon History, 1660-1783*, p. 15.)、五四〜五五頁。＊
図2——中央位置の価値を示す略図(A.T. Mahan, *Naval Strategy*, p. 34.)、八六頁。
図3——ブレヴネにおける戦略的状況、一八七七年(A.T. Mahan, *Naval Strategy*, p. 36.)、八八頁。＊
図4——メキシコ湾とカリブ海(A.T. Mahan, *Naval Strategy*, p. 382.)、一四四〜一四五頁。
図5——ロドニーとド・ギシェン、一七八〇年四月一七日(A.T. Mahan,*The Influence of Sea Power Upon History, 1660-1783*, p. 378.)、二一〇〜二一一頁。
図6——ヨークタウン戦役、一七八一年(National Park Service, *American Revolution at a Glance*.)、二一八頁。＊
図7——グレイヴスとド・グラス、一七八一年九月五日(A.T. Mahan, *The Major Operations of the Navies in the War of American Independence*, p. 180.)、二一九頁。
図8——「栄光の六月一日」の海戦、一七九四年(A.T. Mahan, *The Influence of Sea Power Upon the French Revolution and Empire*, Vol. I, p. 137.)、二三四〜二三五頁。＊
図9——バルト海とその接近路(A.T. Mahan, *Life of Nelson*, Vol. II, p. 74.)、二四〇〜二四一頁。
図10——コペンハーゲンの海戦、一八〇一年四月二日(A.T. Mahan, *Life of Nelson*, Vol. II, p. 80.)、二四四頁。＊
図11——英仏海峡と北海(A.T. Mahan, *Life of Nelson*, Vol. II, p. 121.)、二五四〜二五五頁。＊
図12——北大西洋(A.T. Mahan, *Life of Nelson*, Vol. II, p. 318.)、二六〇〜二六一頁。
図13——トラファルガーの海戦、一八〇五年一〇月二一日(A.T. Mahan, *Life of Nelson*, Vol. II, p. 371.)、二七九頁。
図14——五大湖境界地帯、一八一二年〜一八一四年(A.T. Mahan, *Sea Power in its Relations to the War of 1812*, Vol. I, p. 370.)、三〇二〜三〇三頁＊
図15——西インド諸島、サンティアゴ戦役の作戦行動(A. Westcott, and W.O. Stephens, *A History of Sea Power*, p. 323.)、三一四〜三一五頁。＊
図16——日露海戦の舞台(A.T. Mahan, *Naval Strategy*, p. 426.)、三五八〜三五九頁。

＊とあるのは訳者が新規に追加した図。

編者序文

自身の回顧録『帆船から蒸気船へ』(*From Sail to Steam*)の中で、マハン海軍少将は海軍を一生の仕事とする彼の選択についての父親の見解と自身の後の判断を伝えている。「私のことを注意深く見ていた父は、私が民間の職業ほどには軍人に向いていないと思うと言っていた。今では私自身も父は正しかったと思う。なぜなら、〈海軍での経歴が〉失敗に終わったと不満を言う理由はないが、他の職業ではより成功したはずだと信じているからだ」[001]。

父のデニス・ハート・マハン(Dennis Hart Mahan)は米陸軍士官学校(ウェストポイント)の卒業生で、後には同士官学校の著名な工学教授となっており、したがって息子の性格と軍人の要件を比較する十分な資格があった。そのうえ、父と息子両方の判断は、マハンの名前が今日では他のどの米国海軍士官よりも広く知られている一方で、彼の名声は船や艦隊の指揮官としての功績ではなく偉大な海軍史家と海戦の研究者としての功績に基づいている、という事実により裏付けられているように思われるかもしれない。

▼001 Mahan, *From Sail to Steam*, p. xiv.

第一章 歴史研究の価値[▼001]

シー・パワーの歴史は主として、決してそれだけというわけではないが、国家間の争い、相互に敵対するものたちの争い、しばしば最後には戦争となる暴力的な争いの物語である。海上交易が諸国の富や国力に及ぼす深遠な影響は、海上交易の成長と繁栄を司る真の原則が見出される遥か前から明らかだった。こうした恩恵を自国民に不釣り合いなほどに大きく確保するために、独占や禁制という平和的な立法手段や、それらが失敗したときには直接の暴力によって、他者を締め出すためにあらゆる努力が費やされてきた。利害の衝突、つまり通商の利益および遠く離れた未入植の商業地域のうちすべてではないにせよ、より大きな取り分を専有しようとする、相互に対立する試みにより引き起こされた怒りの感情が、戦争へと導いたのだ。その一方で、その他の原因から生起する戦争は、その遂行と結果が海の管制によって大きく修正されている。したがって、シー・パワーの歴史とは、海上や海岸において国民を強大にする傾向のあるすべての事柄を含むが、主としては軍事史なのだ。シー・パワーの歴史が本書の以下で考察されるのは、必ずしもそれに限定されるわけではないが、主にこの〈軍事史という〉側面においてである。

本書のような過去の軍事史の研究は、〈原則の〉正しい理解、そして将来の戦争の巧みな遂行に欠かせないものとして、偉大な軍事指導者たちにより推奨されている。ナポレオン[❖001]は、向上心に溢れる軍人が研究すべき戦役の中に、火薬がまだ知られていなかった〈時代の〉アレクサンドロス〈大王〉[❖002]とハンニバル[❖003]、カエサル[❖004]の戦役を挙げている。また、戦争の条件の多くは武器の進歩とともに時代ごとに様々に変化するが、歴史という学び場の教えには、依然として変わらないもの、したがって普遍的に適用できるもの、一般原則まで高めることができるものがあることは、専門的著述家の間で相当に合意されている。同じ理由から、過去の海の歴史（シー・ヒストリー）の研究は、過去半世紀の科学的進歩により、また原動力としての蒸気の導入により海軍兵器にもたらされてきた大きな変化にもかかわらず、海洋戦争の一般原則を説明するものとして有益だと言えるだろう。［省略された各頁は、ガレー船と帆船の戦争から引き出される教訓を指摘している。――編者。］

敵対する軍隊や艦隊が接触（コンタクト）〈おそらく他の何よりも明確に戦術と戦略を区分する線を指し

▼001 Mahan, *The Influence of Sea Power upon History, 1660-1783* (Boston, 1890), pp. 1-2, 8-10.

❖001 ナポレオン・ボナパルト（Napoleon Bonaparte, 1769-1821）、コルシカ島出身のフランス軍人、一八〇四年～一八一五年のフランス皇帝。失敗に終わったエジプト遠征の後、一七九九年に帰国してクーデタで統領政府を樹立して第一統領、軍事的独裁者となる。一八一二年のロシア侵攻失敗から情勢が悪化し、最終的には一八一五年のワーテルローの戦いで敗れた。

❖002 マケドニア王アレクサンドロス三世（Alexander III of Macedon, 356 B.C.-323 B.C.）、通称はアレクサンドロス大王。暗殺された父フィリッポス二世に代わって全ギリシアに覇を唱え、東方遠征を行ってアケメネス朝ペルシア帝国を征服し、ギリシア・エジプトからインド西部にまたがる大帝国を建設した。

示す言葉）する前に、戦域全体におよぶ全作戦計画に関し、いくつか決定しなければならない問題がある。これらには、戦争における海軍の適切な役割、その真の目標、海軍が集中すべき一つまたは複数の地点、石炭と糧食の補給廠の設立、これらの補給廠と本国基地の間の交通の維持、戦争の決定的作戦ないし副次的作戦としての通商破壊の軍事的価値、また、この通商破壊を、散開する遊弋艦（クルーザー）[005]によるものであろうと通商船舶が必ず通過するいくつかの重要地点を大挙して掌握することによるものであろうと、最も有効に遂行するための体制が含まれる。これらはすべて戦略的な問題であり、これらすべてについて歴史は多くを語っている。近年、イギリスの海軍軍人の間では、フランスとの戦争時〈フランス革命戦争〉のイギリス海軍の配置に関する、ハウ卿[006]とセント・ヴィンセント卿[007]というイギリスの二人の偉大な提督の方針の相対的な長所について、価値ある議論が行われている。この問題は純粋に戦略的なもので、単に歴史的重要性があるだけではない。今でも非常に重要であり、その決断が依拠する原則は当時も今も同じである。セント・ヴィンセントの方針はイギリスを侵略から守り、ネルソン[008]と彼の同僚の提督たちによってトラファルガー〈の海戦〉という結果をもたらした。

そういうわけで、過去の教えに全く失われることのない価値があるのは、海

❖003 ハンニバル（Hannibal, 247 B.C.-c. 183 B.C.）は、第二回ポエニ戦争でローマと戦ったカルタゴの将軍。紀元前二一六年のカンナエの戦いでローマ軍を包囲殲滅するが、紀元前二〇二年のザマの戦いでローマ軍に敗れる。

❖004 カエサル（Caesar, 100 B.C.-44 B.C.）は、ローマの政治家、将軍。紀元前五八年から紀元前五一年にかけてのガリア戦争に勝利してガリア全域をローマの属州とし、ブリテン島にも侵攻した。

❖005 当時の艦種を示す用語ではなく、作戦のために分遣される戦闘艦はその艦種や大きさにかかわらずこう呼ばれた。

❖006 初代ハウ伯リチャード・ハウ海軍元帥（Admiral of the Fleet Richard, Earl Howe, 1726-1799）、当時最も重要なイギリスの海軍士官、アメリ

軍戦略の分野において特にそうだろう。条件が相対的に不変であるために、基本原則の例証としてだけでなく、先例としても有益なのだ。これは、戦略的考察が艦隊を導いた地点で両艦隊が衝突する、戦術に関してはそれほど明確な真理ではない。人類の絶えざる進歩は兵器の不断の変化を引き起こし、それとともに戦い方も――戦場における兵士や船の扱いと配置において――不断に変化するに違いない。したがって、海に関係する多くの人々は、過去の経験を学ぶことから得られる利益などない、研究に費やされる時間は無駄だと考える傾向が生まれる。この見方は自然なものではあるが、諸国が艦隊を海に出し、その活動範囲を指示するよう導き、そうして世界の歴史を変えてきたし、これからも変え続ける広範な戦略的考察を完全に視界の外に置いてしまうものであるだけでなく、戦術に関してでさえ一方的で偏狭な見方でもある。過去の戦闘は、戦争の基本原則に準拠して戦われたかどうかに応じて勝負が決まった。勝敗の原因を注意深く学ぶ海軍軍人は、これらの基本原則を見出し徐々に吸収するだけでなく、自身の時代の船と兵器の戦術的利用にそれらを適用する優れた素質を手に入れるだろう。また、必然的なことだが、戦術の変化は兵器の変化の後で起こっただけでなく、こうした変化の間隔がはなはだ長いということにも気付くだろう。それは、兵器の改良は一人か二人の人物による努力の賜物である

カ独立戦争とフランス革命戦争の両方で功績を挙げたほか、一七八三年から一七八八年まで海軍大臣を務めた。フランス革命戦争中には西インド諸島で活躍し、フランスの様々な重要な島を攻略した。その後、地中海艦隊の指揮を任され、一七九七年にはサン・ビセンテ岬沖でスペイン艦隊に対して偉大な勝利を収め、伯爵に叙せられた。

❖008 ホレイショ・ネルソン海軍中将、初代子爵（Vice Ad-

のに、戦術の変化は保守的な人々の惰性を克服しなければならないという事実に基づいているのは間違いない。しかし、これは大きな悪弊なのだ。それは、一つ一つの変化を率直に認めること、新しい船や兵器の力と限界を慎重に研究すること、そしてその結果として、その船や兵器の戦術となる、それらが持つ能力を発揮する使用法を採用することによってのみ是正できるだろう。軍人一般がこうした骨折りをすると望んでも無意味だが、この努力をする者は大いに有利な立場で戦いに出るだろうということを歴史は示している――それ自体、小さからぬ価値ある教訓なのだ。

miral Horatio, first Viscount Nelson, 1758-1805)、サン・ビセンテ岬の海戦、ナイル(アブキール湾)の海戦、コペンハーゲン襲撃などで功績を挙げる。トラファルガーの海戦では、自身は命を落としながらフランス・スペイン連合艦隊を壊滅させた。コペンハーゲン襲撃については本書二三章、トラファルガーの海戦については本書二五章を見よ。

第二章｜「理論的」訓練vs「実践的」訓練[▼002]

歴史的事例

海軍士官、また現役軍務に召集されるすべての軍人を、彼らの任務の遂行に適すように〈訓練〉するための一番の方法が何であるかについては、昔から二つの対立する意見がある。その一つ、いわゆる実践的軍人の意見は、早くから海に出て海上に留まり続けることが必要なすべてだというもので、もう一つの意見は、研究、〈すなわち〉入念な知的準備に最適な結果を見出すものだ。私は、個人的には米国海軍は後者の側に偏りすぎていると考えていると公言することに何のためらいもない。しかし、それをさておいても、非常に広範に行われている知的活動が、戦闘の中での船の統御や海軍戦役の計画、戦略的問題と戦術的問題の研究、さらには海上での軍事作戦の維持〈兵站〉に関係する副次的事項に

▼002 Mahan, "Objects of the Naval War College," *Naval Administration and Warfare* (Boston, 1908), pp. 193-194, 233-240.〈訳註。一八八八年の海軍大学校での講演。〉

あ

アームストロング，ジョン（米国陸軍長官）　305
アイルランド　66-67, 252, 355, 361, 395, 396, 416
アイルランド海　66, 396
アジア　114, 369, 371, 378, 396, 427
　→「中国」「日本」「極東」
アシャント島（ウェサン島）　226
アッパー・カナダ　298, 301, 306
アデン　15, 200
アドリア海　53, 386, 405
アナポリス　12
アネガダ海峡　148
アフリカ　19, 76, 370, 400
　→「南アフリカ」
アムステルダム　63, 69
アメリカ独立戦争　34, 49, 124, 427
　――イギリスの賢明でない政策方針　190-191
　――シー・パワーの影響　214-221
アラスカ　69
アラバ，イグナシオ・マリア・デ（スペイン海軍中将）　279, 280
アラバマ号（南部連合遊弋艦）　136
アルザス＝ロレーヌ　409, 434
アルヘシラス会議　387
アルメニア　429, 432
アレクサンドル一世（ロシア皇帝）　37, 293-295
アレクサンドロス大王の戦役　29, 40
アンティグア島　147
アントウェルペン　59, 419
アンリ四世（フランス王）　68

い

イーストポート（米国）　101
イギリス
　――海軍力の成長　21, 61-63, 73-74
　――植民地政策　75-76, 427
　――海軍政策　77-79, 187-193
　――米国の利害の一致　154, 371-376, 400-403, 406
　――アメリカ独立戦争　190-191
　――七年戦争において獲得したもの　194-202
　――第一防衛線としての海軍　249-253
　――ナポレオンとの通商戦争　289-295, 392
　――帝国連合の問題　373
　――ドイツに脅かされる　383-389
　――海上での私有財産拿捕に関する方針　416-422
　→「海軍（イギリス）」
イタリア
　――位置　52-53
　――海からの攻撃に晒される　19, 65-66
　――三〇年戦争　82, 83, 89, 91, 93
　――ナポレオン戦争　112, 119, 249, 259
　――統一　373
　――ドイツおよびオーストリアの権益と相反する権益　386-387, 399
イングランド→「イギリス」
インディアナ準州　300
インド
　――イギリス人　189, 194, 199, 400, 427
　――インドへの航路　200-201
インド洋　125, 396

う

ヴァーモント州　298
ヴァンジュール号（フランス船）　233, 236-237
ヴィクトリー号（ネルソン旗艦）　249, 262, 266, 277, 279, 282-283
ヴィスワ川　114
ヴィメルー　249
ヴィラレ＝ジョワイユーズ，ルイ・トマス（フランス海軍中将）　230
ウィリアム三世（イギリス王）　118, 355, 361
ウィルキンソン，ジェイムズ（米国陸軍少将）　307
ヴィルヌーヴ伯（フランス海軍中将）
　――引用　224
　――トラファルガー戦役　256-257, 259, 264, 272-289
ヴィルヘルム二世（ドイツ皇帝）　20, 22
ウィンドワード海峡　142, 146-148, 153
ウーアソン海峡　84, 242-243, 248
ウェストポイント　12
ヴェネツィア　386
ウェリントン公（イギリス陸軍元帥）　120, 304, 309
ウラジオストック　100-101, 109, 121, 127
　――ウラジオストック拠点とする戦隊　331-337, 342, 346-347, 352
　――ロジェストヴェンスキーの目標　354-362
ウルム　82, 106, 112, 249

え

「栄光の六月一日」の海戦　226-237
英仏海峡　49-52, 56, 60, 85, 104, 185, 256, 312
　――ナポレオンに対する防衛体制　249-253
　――イギリスによる管制　394-397
エジプト
　――ナポレオン　91, 105, 171, 250
　――イギリス統治　200, 249, 427
エスカリオ，フェデリコ（スペイン陸軍准将）　329
エタプル　249
エリー湖での作戦　300, 304-306, 308-309, 310
エル・カネイ　329

お

鴨緑江　344
オークニー諸島　394, 395
オーストラリア　195, 196, 388, 435, 438
オーストラレイシア　435
オーストリア　37, 58, 383
　――三〇年戦争　82 ff.
　――ナポレオン戦争　38-39, 112-113, 118, 249, 257, 294
　――七年戦争　194
　――ドイツの同盟国　86, 385-387, 399, 405, 406, 410
オスウィーゴ　299
オトラント海峡　387
オハイオ州　300
オランダ
　――通商への依存　42, 61-63
　――シー・パワーとして　48, 49
　――交易　52
　――ベルギーの港を閉鎖　58-59
　――チャタム襲撃　59
　――イギリスとの海軍競争　61-63, 394
　――対スペイン戦争　67-69, 426
　――植民地政策　76
　――河川　105
　――ルイ一四世の戦争　182-186
　――ナポレオン戦争　252
　――ドイツに併合される可能性　368, 402
オレゴン号（米国海軍艦艇）　92-93
オンタリオ湖
　――一八一二年戦争における戦役　296-310

か

カーティス，ロジャー（イギリス艦隊艦長）　229, 230, 237
カーボベルデ諸島　311
カール大公の戦役　37 ff.
海員登録　73-74
海岸
　――海軍発展への影響　56-61, 70-72
　――防衛　128, 174-180
　――要塞化　336-337
　→「境界（地帯）・国境」
海軍（イギリス）
　――士官の訓練　33-35
　――フランス海軍との比較　73-74
　――演習　107

［著者］
アルフレッド・セイヤー・マハン ❖ Alfred Thayer Mahan
一八四〇―一九一四年。米国の海軍士官、海軍史家、海軍戦略家。最終階級は海軍少将。二度にわたって海軍大学校校長を務め、海軍戦略を講義した。一八九〇年、海軍大学校の講義録を元に『シー・パワーが歴史に及ぼした影響』(*The Influence of Sea Power upon History*)を出版し、海軍史家および海軍戦略家として世界的に名声を博す。同時代の国際関係や外交に関する著作も多く、政治家との交流や世論への働きかけを通じて米国の外交・海軍政策に影響力を振るった。マッキンダーとともに地政学の祖としても知られる。主著は「シー・パワー」シリーズ三部作のほか、『ネルソン伝』(*The Life of Nelson*)、『アジアの問題』(*The Problem of Asia*)、『海軍戦略』(*Naval Strategy*)など。

［編者］
アラン・ウェストコット ❖ Allan Westcott
一八八二―一九五三年。米海軍兵学校の教授。コロンビア大学から博士号を授与された後に、米海軍兵学校の英文学講師となる。『マハン海戦論』(*Mahan on Naval Warfare*)を編集したほか、共著に『シー・パワーの歴史』(*A History of Sea Power*)、『米海軍の歴史』(*The United States Navy: A History*)などがあり、いずれも海軍兵学校の教科書として利用された。

［訳者］
矢吹啓 ❖ Hiraku Yabuki
東京大学文学部卒業、東京大学大学院修士課程修了、東京大学大学院博士課程満期退学。キングス・カレッジ・ロンドン戦争研究科博士課程留学。日本学術振興会特別研究員。主として一九世紀から二〇世紀初頭にかけてのイギリス海軍史・海戦史および日英関係史を研究している。主要業績として、"Britain and the resale of Argentine cruisers to Japan before the Russo-Japanese War," *War in History*, Vol. 16, No. 4 (2009)、「二〇世紀初頭の英国海軍史における修正主義――フィッシャー期、一九〇四～一九一九」『歴史学研究』(第八五一号、二〇〇九年)、「ドイツの脅威――イギリス海軍から見た英独建艦競争、一八九八～一九一八年」『ドイツ史と戦争』(彩流社、二〇一一年)など。翻訳書にジュリアン・スタフォード・コーベット著、エリック・J・グロウヴ編『コーベット海洋戦略の諸原則』(原書房、二〇一六年)がある。

マハン海戦論

二〇一七年一〇月三〇日　初版第一刷発行

著者――アルフレッド・セイヤー・マハン
編者――アラン・ウェストコット
訳者――矢吹啓
発行者――成瀬雅人
発行所――株式会社原書房
〒一六〇－〇〇二二　東京都新宿区新宿一－二五－一三
電話・代表　〇三(三三五四)〇六八五
http://www.harashobo.co.jp
振替・〇〇一五〇－六－一五一五九四

ブックデザイン――小沼宏之
印刷――新灯印刷株式会社
製本――東京美術紙工協業組合

©Hiraku Yabuki, 2017

ISBN978-4-562-05436-7
Printed in Japan

Mahan on naval warfare: selections from the writings of Rear Admiral Alfred T. Mahan
by Alfred Thayer Mahan
edited by Allan Westcott
This book was originally published in 1918 by Little, Brown, and co., Boston.